三京印象記[[1]](#footnote-1)

李光洙

　今度の大東亞文學者大會に加はつて、私はいくつもの貴い感激と體験を得ることが出來た。私は、それをもつとも簡單な形で書いて見たいと思ふ。

東京見學メモ

　東京は私の第二の故郷だ。明治三十九年の夏、十四歳の少年の私は、初めて新橋驛に降りて東京の土を踏んだ。それから中學と早稲田大學文科とを東京でやつたし、その後私の家族が三年間東京に住んで居つたのである。生れは朝鮮だが、教育は東京で受けたわけだ。

　しかし、今度の東京入は、恰かも初めて東京を見るかのやうに、私にはフレッシュであつた。それは東京そのものの性格が變つたせゐでもあり、私自身の心境が變つたせゐでもあらう。東京は今や、日本だけの都ではなく、アジア大共榮圏の都だ。大御稜威は大東亞全域に光被してゐる。東京の政治力、文化力はアジア諸民族の政治と文化の源泉であり、原動力であることを誰が否まう。私はこの東京を初めて見たのだ。

　十一月一日の夕暮、私は滿、華の文學者代表たちの一行に加はつて、東京驛に到着、直ちに二重橋前で、宮城を遥拜し奉つた。折しも秋雨晴れての夕闇、それこそ淨闇といふ名にふさはしい黄昏であつた。

「微臣香山光郎、謹んで聖壽の萬歳を壽ぎまつる」

　と鞠躬した刹那、私は胸の詰まる感激に浸つた。私は大君を戴く身のありがたさを沁み沁み感ずることが出來た。私には實に尊い一刹那であつた。

　翌くる二日の朝は、靖國神社に參拜して、明治神宮の國民錬成大會に臨んだ。會場への途中、私達はすばらしい富士を仰ぐことが出來た。車中では雨や雲で、たうとう富士の姿を見ずに終つた。

　富士山の見えぬ旅の秋の雨

など佗しく思つたものである。ところが、このすばらしい富士だ。胸まで新雪で装つて朝日に照らされた富士を見たのである。

　この日は兩　陛下御揃の御臨場で、私は　天覧の競技を陪觀したのだ。

　總員起立、君が代の樂の音が、静寂そのものゝ中を流れる。最敬禮。至尊を仰ぎまつる民草の感激。

「すべてを　陛下に捧げます」

　といふ、魂たちの無言の誓。私はそれをはつきりと聞き取ることが出來、また自分の胸に感ずることが出來た。一億一心とはこのことであらうと思つた。

　あとで、隣席の或外國人が、これは日本に於てのみあるべきことだといつてゐた。

　三日は明治神宮參拜。文字通り潮の如き參拜者の群であつた。支那の代表達の眉宇には異常な感動が現はれてゐるやうに見えた。女生徒たちの古ぼけた制服が床しかつた。

　同日帝劇で開かれた、大東亞文學者第一回大會の開会式は私としては初めて見た豪華版であつた。

「武力での軍は私共が引受けます、貴方方は思想戰の將兵であられる」

　と平出海軍報道部課長がにいはれた時には、眼が熱くなつた。

　東亞精神もあつた筈だ。東亞文化もあつた筈だ。それが西洋精神のペンキで塗りつぶされてゐたのだ。そして堂々たる法王子の身でありながら糞掃の賤役に甘んじてゐた東亞諸民族である。皇軍が血を以て拭淨めた東亞に、正眞正銘の大東亞文化を樹てようといふのが、今度の大會の趣旨と受取れた。「大東亞文化は亡びませぬ」といはれた奥村情報局次長のことばはもつともである。それが亡びてたまるものか。

　大東亞文化復興のための大會をヨーロッパ式の華美な帝劇でやつたところで、それは皮肉でもなんでもない。鐵筋コンクリートやピアノやギターだつて大東亞精神の中に融け込ませるのが、大東亞精神であるべきである。

　帝劇のマチネーに招待された。お蔭で秋田雨雀氏に逢つた。私の「愛」を讀まれたんださうで、金史良君に私に逢ひたい旨を傅へられたので、ロビーでお會ひした。立話をしながらしょつちゆう足を動かして居られた。如何にも小柄な、鋭さうな方で、なるほど雀を聯想させるところもあると思つた。

　菊池寛氏に夕飯に呼ばれた。菊池寛氏には昨年京城で初めて逢つたが、殆んど話す機會はなかつた。太つて、丈が低くて、髪がもぢゃもぢゃして居つて、顔は凸凹で、窪んだ小さい眼をしょつちゅうパチパチさせてゐる。むつつりした難かしさうな顔だが、飾氣のない、思ひやり深い人物と思つた。ぽつりぽつり口を利くが、ぶつきら棒のやうで、墨繪の一點一劃のやうに無駄のない、含蓄のあることばであつた。

　菊池氏が家から下げて來た酒を半分ばかり飲んで、今度は築地の何んとかいふところへ移つた。そこには、中支の代表連を呼んであるといふのだつた。酒の後の半分はそのお客さんのためだ。

「君も東京で小説を賣るんだらう。それなら東京の文人達に逢つて置いた方がいゝ。顔を知らぬと中々批評も書いて呉れぬのでね。」

　私を東京の文人方に引合はせようといふ老婆心と知れたのでついて往つた。

　片岡鐵兵、河上徹太郎、横光利一、吉川英治、舟橋聖一、林房雄夫妻といつた方々が集まつて居られた。いづれも兪鎭午氏や私にとつては初對面の人許りである。片岡鐵兵氏はカーライルのやうな顔で、河上氏は貴公子、横光氏は肯かぬ氣の觀察者で、舟橋氏は實業家の若主人、吉川氏は瞑想家でちやつかりやといつたやうな感じだつた。林房雄氏は和服の袂をぱたぱたさせて盛んな氣焔家に見えた。御大の菊池先生は眼をパチパチしながら煙草ばかり吹かして居られたが、日に二百本も吸はれるさうである。

　十時近くにもなつてやつと周化人、丁丁、柳雨生、許錫慶諸氏が見えた。周化人は汪主席の腹心で、宣傅部次長の肩書を持つてゐるだけに、さすが腹も出來てゐて、能く飲み能く笑ひ、上衣を取つて寛ぐと見せながら、心の兜の緒を締めるといつた、中々のしたゝか者に見えた。丁丁はこだはりのない、子供のやうな人であつたが、許錫慶は、にこにこしてゐて、中々心の扉を開かない。二十七歳で大學教授などの肩書を持つてゐる柳雨生は、才子である。觀るに鋭く、學ぶに熱心な人のやうであつた。「怜俐者」と見られるのは氣の毒であつた。

六日である。文學者大會も上首尾に終つた。報國會當局も豫想以上だといつて喜びあつて居られた。日本を中心にして、大東亞諸民族一團となつて、大東亞精神の文化を打建てようと誓ふことが出來たのである。しかも、恒久的機關設置案など、幾多の提案が、支那側代表によつてなされたことは、何んと幸ひなことであらう。朴訥で眞摯な錢稻孫氏や、もつとも政治家的な周化人氏から繰返し繰返し、「及ばずながら日本を中心として大東亞文化の復興のため全力を盡すやう、筆を揮つて自國の同胞に説き聞かす」と宣言することばを聽いたのは、重大な成果であると思ふ。

　大會をこゝまで導いたのが、大御稜威であることは、久米正雄氏の言ふ通りであるが、まことに東亞のために賀すべきことである。大東亞戰爭がわが勝利に終つて、アジア十億が一丸となつて、その豊富な自然的、人的資源を利用して、新しい世界、新しい文化を打樹てた暁、その世界、その文化は空前のものであるに違ひない。しかもその基調をなすものは皇道であるのである。地球が曾て夢想だもしなかつた榮光を、我等は已に、一歩一歩建設しつゝあるのである。生けるしろしある御代に生まれ合はせた、皇民われ、顧みなくて醜の御楯と出で行くことの出來るのは、何んとありがたい倖であらう。文學者も思想戰の將兵である！

　六日一行は、霞浦、土浦を見學した。本當の醜の御楯の訓練振りを見るのだ。

「今やアメリカは本氣で戰つてゐる。われわれは寡を以て衆に當らなければならぬ」

　これは司令官の挨拶の一節である。

　練習機は數限りもなく飛んでゐた。海の雛鷲たちの必殺必勝の猛訓練なのだ。

　殉國荒鷲の忠靈を祭つた霞浦神社に參拜後、飛行場に導かれた。アメリカが日本の○機として恐れてゐる新型戰闘機の戰闘振りを見せていたゞいた。何んと凄い速力、自由自在な操縦振りであらう。數千米の上空から眞逆様に落ちるかと見てゐる間に、精悍なあの機體が仰向けに、電の如く頭上、低空を飛過ぎる瞬間は息が詰まつた。

「凄いね」

　菊池寛氏は、子供のやうに驚嘆して居られた。支那、滿洲の代表たちも固唾を呑んで無言である。

　兵學校を出たばかりの少尉たちが航空訓練を受けてゐる實況を見學した。その中で徳川少尉といふのは将軍家の御曹子ださうである。一平民の子と全然無差別ださうだ。

　土浦では雛鷲たちの全員集合の状況を見たし、體操といふものも、見せていたゞいた。雲霞の如く場内に押寄せて、瞬く間にちやんと整列を終へた。數へよう[にも]教へ切れる數字ではないのだ。物凄い多數なのだ。それが雲霞の如く瞬間に集まつて整列するさまは、その精神と訓練とを示すのだ。

　體操といふのが、また物凄いもので、普通われ等が體操と呼んでゐゐやうなものから始るのであるが、段段曲藝の形に移り、おやおやと眼を瞠る程度のものとなる。それを五十分間ぶつとほし連續するのだ。普通人なら十分か十五分でへたばるさうである。

「身體を柔軟にするのです。あゝいふ風に鍛へて置かぬと落下傘で降下する場合など腰を抜かします」

　將校はかう説明して下さつた。

「柔軟！」しかり柔軟こそ心身の修行の極點だ。硬直ではいけない。心は己を取り除くことによつて柔軟となる。これを自在を得るといふ。己なければ畏なし。無畏である。無畏の心、柔軟な身體、これこそ醜の御楯の要件であらう。

「あの向つて右側の幾列かはもう訓練が卒つたのです。明日でも前線へ出られるのです。所謂海の荒鷲です。張切つてゐます。」

　將校の説明に眼頭が熱くなつた。國はかくして護られてゐるのである。その若者たちを拜みたい氣持になる。旣にソロモン海で戰つてゐられるのも、布畦を襲はれたあの勇士たちも、皆こゝで、かやうに育つた人たちである。

　感激で胸が一杯になつて、利根川の枯蘆や小舟の夕陽を賞しつゝ上野驛へ歸り着いたのは日暮頃であつた。

　驛で私はどうしたのか、一行にはぐれてしまつた。六時までにはアラスカ[[2]](#footnote-2)の朝日新聞の座談會に出なくちやならない。

　途方に暮れてゐると菊池寛先生に逢つた。廣小路でタクシーを拾ひ、銀座のアラスカに送り届けて戴いた。

朝日新聞の座談會が濟むと、林房雄氏は滿洲の古丁氏と私とを自動車に載せて拉し去つた。小林秀雄氏に逢ふんだといふことであつた。

　ところは目黑茶寮の主人秦氏[[3]](#footnote-3)の居間で、埴輪だの、爲體の知れぬ土器や陶器を並べた一室に、よせなべを前にして小林秀雄、青山二郎外二三の、一見俗塵離れした面々が、酒を酌み交はしてゐるところだつた。小林氏だけは昨年京城でお會ひしたことがある。

　古丁氏と私とが林房雄氏によつて一座に紹介され、直ちに杯の總攻撃である。古丁氏は若くもあるし身體も壯健で、酒もいけるやうだつたが、私はさうは行かない。

「是非、醉ひつぶれて呉れ、醉つた李光洙を見せて呉れ」

　林氏のこの言の意味は私にはよく解つた。

　それならばといふので、私は勸められるまゝに飲んだ。そして醉のまはるまゝに喋つて遂に林氏の注文通りに前後不覺になつてしまつた。

　眼が醒めたら私は一室に寝かされてゐて、林夫人が介抱してゐられた。

　次に眼が醒めたら傍に古丁氏が熟睡してゐた。風呂に浸かつてゐると林氏も、小林氏も、古丁氏も青山氏も赤い眼をして入つて來た。小林氏もさうだが、青山二郎氏はそのまゝ置物にしたいやうな、俗氣のない顔であつた。朝食後緣側で、小春の日光を浴びながら時の流れを忘れたやうな數時間を過すことが出來たのは嬉しかつた。

　珍客と緣側つどひの小春かな

　何んだか自分が主人になつたやうだ。

　林房雄氏夫妻に連れられて、鎌倉へ往つた。

　淨明寺宅問谷の林氏宅は景色がよい。まるで隱棲である。あんな快活な林氏には似合はぬやうな氣がした。

　ちょろちよろと流れの音もあり、門前には菊が咲きみだれてゐる。門前とはいふものゝ門はなかつた。お庭の芝生が周圍の山とぢかに續いてゐる。

　菊植ゑて門を構へぬ房雄かな

などいつて見たくなつた。呆れた明放し方である。

　書斎に見事な、墨繪の鯛が二幅も掲げてあつたから、主人の自作かと思つたら、御自分で釣上げた獲物の押繪ださうである。當時の主人の得意の様を想像して見た。

景色と、山水と、柿と友情の御馳走になって、三時間も庭で語つて東京へ戻つた。雪の下の大佛次郎氏宅を訪ねたかったが六時の座談會のため、出來なかったのは殘念でもあり失禮でもあつた。大佛氏は一昨年京城でお會ひしただけだが、著書や手紙も戴いてゐる。

　いよいよ明日は東京を離れるといふ八日の日程は文展、博物館、東日の午餐と、能の見學である。

　見はらしのよい東日の大食堂、すばらしいせろりの御馳走になつて厩橋の梅若流の能舞臺に導かれた。支那や滿洲のお客さんたちは一人も來てゐない。私達朝鮮からのものがお客のやうな形となつた。

「巴」であつた。私は能樂は初めてだが意味が解つたやうな氣がした。その無駄のなさ、枯淡さなど芝居の禪といふべきだと思つた。恐らく劇藝術の最高のものであらう。私はこの中にも、日本精神と佛教との融合を見出したと思つた。茶室は建築の禪、懷石は食事の禪、能樂は芝居の禪、俳句は詩の禪と私は、「巴」を見終つて、かう思った。

「君に見て貰つで嬉しかつた。能を君は解つてくれたと思ふ」

　久米正雄氏が、私の肩を叩いていはれたことばである。私は能の味のする小説を書いて見たいとも思つた。

宇治山田參拜メモ

稲の黄金の波の間を走つて宇治山田に着いたのは九日の夕暮れであつた。直ぐ外宮に參拜、古市の旅館大安に入つた。四日市、津、松坂など驛名だけでもなつかしかつたが、沿道の、夕陽は實に美しかつた。日の沈む方の山々の紫煙は今だに忘れられない。どの川もどの川も水は綺麗で砂は白い。それが山田に近づくにつれて一層さうであつた。

　大安に着いて初めて、日本間に寝ることが出來て嬉しかつた。朝眼が醒めると、緣側に一杯朝の光が溢れてゐた。この緣側からは、町や人家は一つも見えなくて、道路さへ見えなくて、朝の光に照らされた山や森ばかりが、神代さながらの姿であつた。空には一點の雲もない。清淨そのものである。

　私は湯殿へ行つて冷水を浴びた。大神宮さまへの初參拜だ。身も心も淨めなければならない。

　氣温は相當下つてゐて、用水には薄氷さへ張つてゐた。

　一同内宮參拜に出掛けたのはまだ暗い中であつた。

　宇治大橋を渡ると、神林の中にはまだ暁闇が籠つてゐる。五十鈴川の畔に立つて、鯉の遊ぶのを見てゐると、急に神路山が明るくなつた。鯉は日の神様の魚である。こゝで一同打揃つて、年古りたる杉や檜の並木の蔭を潜り、奥へ奥へとしづかに歩を移す。手水舎で手や口を淨め、襟を正し、心を虚しうする。

　外玉垣南御門前に一同整列、甲賀三郎氏の先導で、拍手の拜禮をする。終つて正殿を仰ぐ。

いしへの人の歌ひしその歌を

　　われも歌はむ宇治の大橋

　私たちが、參拜を終へて戻る頃は、五六校の男女生徒が、粛々と神域内へ入つて來るのに逢つた。神ながらの手振倣はんとてである。

　錢稻孫氏は神宮前で、自國の人たちに神宮の由緒を説明して、

「祖先崇拜は東洋道徳の根本である。この神宮は、日本天皇の御祖先をお祭りするところだ。といはれた。

この説明は一應もつともである。しかし日本人に取つては、たゞそれだけではない。鏡で象徴された清明心は、道徳の最高の目標、從つて修行の最後の理想を示して居り、同時に宇宙の根本たる大靈に繼がる宗教的歸依の信仰の對象ともなるのである。まことの本源を、生生發展の力の泉を、この大神の中に仰ぐのである。

　　奈良見學メモ

内宮參拜後宿へ歸つて朝食を攝る。大阪へ直行。大阪で知事主催の午餐會あり、中之島公會堂の講演があり、閉會式があつた。

　谷崎潤一郎氏の講演を聽いた。近畿地方にもつとも日本的なものが多く殘つてゐる。東京はモダン化されても京都、奈良、大阪には今尚古い日本の傅統が多分に味はれる。ほんたうの日本の姿を見ようなら關西に來れ。東京生れの自分が關西に落着いたのも、そのためである、といふ筋であつた。

　奈良ホテルに落著く。

　夕食後一行の人たちは遊びに出掛けた。中支の周化人氏も、あたふた連れに遅れまいと坂を驅け降りた。

　私はホテルの庭で新月の沈むところを眺めて昔を偲んだ。その新月がとても大きく見えた。それが沈むのは生駒だらうか。河上徹太郎氏も一緒に月を眺めた。

　私は河上氏に誘はれてホテルの洒場へ往つた。久米正雄さんが東京から持參のサントリーが一本殘つてゐるさうで、ウヰスキーソーダにして飲んだ。大變おいしかつた。

「飲め飲め」と河上氏に勸められるまゝに五六杯もあふつた。河上氏も私を醉はせようとするらしい。林房雄氏の手だ。香山の奴、一つ本音を吐かせてやらうといふのだらう。或は河上氏も私も奈良時代に、荒池の畔で飲みつぶれた舊緣があるのかも知れぬ。私が惠慈か曇徴のお供をして來てゐたのかも知れぬ。行基の連れであつたこともあり得る。ほろほろと鳴く山鳥の聲を三笠山に聽いたのかも知れぬ。それで私は奈良が無性に懷しく、河上さんも東京からわざわざ來て、私と奈良の都の新月に胸を搏たれたのだらう。

　よし。飲まう。本音どころか泥を吐いてもいゝ。私には衆生に對して、隱すべき何事もないつもりである。醉つて見せる醜さがあるなら、それが私の眞の姿であらう。私に眞心を求める友にわがありのまゝを見せないでどうしよう。

　十一時まで飲み且つ語つた。三時間も經つたのだ。草野心平氏も途中で加はつた。怖さうな面構へであるが、案外柔かい人物だ。詩人である。

　久米さんが來た時分には、もうサントリーの瓶は空になつてゐたやうで、久米さんは飲みたさうな顔して居られた。

　翌朝私は春日山の日の出を拜むことが出來た。猿澤や荒池からは、濛々と白い湯氣が立ち昇つてゐて、恰かも、その湯氣で包まれるやうに、若草山も、春目の森も白靄につゝまれた。そこへ赤いお日さまがぬつと昇つて來た。興福寺の塔が頭だけを出してゐる。

　やがて嫩草山の芝生がさつと現れた。何んと柔かい、なだらかさだらう。

　午前十時。一同バスで橿原神宮參拜の途に上る。あちこち見える池は、聖武天皇の御代に行基菩薩の進言により掘らせたまうたものの名殘であらう。坦々たる平野を疾驅すること約一時間畝傍の欝蒼たる神域に著く。

　後續の一行を待ちながら一の鳥居の前の廣場で二千六百年の昔の、神武御創業の日を偲び申上げる。八紘を掩うて宇と爲す。宇とは皇道文化の花咲く國のことである。地上極樂のことである。それは樂しい住家であると同時に嚴しい道場のことである。

　今や皇軍は北陸に南洋に大「ことむけ」の進軍をしてゐる。米英の長髓に鞭打つてゐる。アメリカ大陸にも濠洲にも已に三よりの綱はかゝつた。一旦言舉したからには、いつかな後へは退かぬ、貫徹せずには止まぬのである。

　早暁は寒かつたが、日が昇るにつれて、オーバが荷になる位に暖かになつた。麗かな小春日和だ。かげろふさへ見えさうだ。

　遲れた一行が來たので打揃つて參道を進む。參拜の學生の群がひきも切らない。群衆に揉まれながら拜殿の前に整列する。遥か奥の正殿内では、白衣の神官が祝言を奏上してゐろのが見えて、一層崇嚴さを添へた。

「橿原神宮であります。正式の參拜を致しませう」

といふ久米正雄氏の提議で一揖二拜二拍手一揖の神式の禮をした。

法隆寺に着いたのは正午近くであつた。そのかみは一面森林であつたらうと思はれる、寺の周圍は耕されて稻が穂を垂れて居り、南大門の直ぐ前まで人家が建てられてあつた。

　寺全體の感じは、輕く、優しく、明るくて、支那や朝鮮の寺院建築に見られるやうな、嚴壓的なところがない。國寶づくめの法降寺だ。私なぞがどうのかうの云はれた義理ではない。唯私は一朝鮮人として、

　聖徳太子を特におなつかしくお慕ひ申上げる理由がある。それはかうだ――

　聖徳太子に、法華經を御進講申上げたのが高勾麗の僧惠慈大師で、佛閣佛像などの御造營の役を仰付かつたのが、百濟の僧惠聰大師である。惠聰は慈聰ともいふ。それから法隆寺の彼の有名な壁畫は、高勾麗の曇徴の作といふことになつて居る。

　聖徳太子薨去の訃が高勾麗に傳はると、その時は高勾麗に歸つてゐた惠慈大師は、慟哭して、東海の聖人隱れました。拙僧も來年の太子の御命日には御跡を從ふであらうといはれて、その通り入寂されたといふことである。

　以和爲貴、篤敬三寶、承詔必謹の三箇條を基調とした十七箇條の憲法の御制定にも、惠慈大師の獻替多かつたといふことである。

　法隆寺の東院は、聖徳太子の御起居したまうた斑鳩宮の跡だ。惠慈も惠聰も曇徴も、恐らく側近に侍してゐたことであらう。

　現在、扶餘神宮御造營地である扶餘に於いて、法隆寺と規模を同じうした寺院の跡が發掘されたさうである。

　久米正雄氏が、上野の博物館の時から特に私に、百濟觀音に注意させて下さつたのも、さういふ意味であつたらうし、河上徹太郎氏が、薬師寺の聖觀音を私に注意させたのも同様だらうと思ふ。

　法隆寺は、「信佛法、尊神道」と申上げられた

　用明天皇の御發願で、推古天皇、聖徳太子の御本願に依るものであるが、これこそ、日本に佛法の基礎を固めた大聖業であつたのである。この聖業に高勾麗や百濟の僧がお仕へ申上げたことは決して偶然とは思はれない。げにも深い因緣といはなければならない。

　今法隆寺を、多くの人は藝術的に尊重してゐるやうであるが、私がこゝで感じたことはそれ以上のものがあると信ずる。それは聖徳太子の御精神に打たれたことだ。太子は眞理と慈悲とそして愛國の精神の權化であらせられた。法華經に現はれたる佛法の精神を太子は、そのまゝ日本の國に實現しようとしたまうたのである。日本こそ大乗の地であると信ぜられた。これによつて日本を眞理の國とし、慈悲の國とし、そしてこの理想を實現するためには、日本人各々が不惜身命の大我大勇に生死する國にしようとしたまうたのである。

　誰でも佛になり得る。氣まぐれに佛像の前で一寸點頭したものも皆成佛した。子供の遊びに砂上に佛像を書いたゞけで、皆成佛してゐる。佛の名を聞いたゞけでも成佛疑ひないのだ。しかし、それは久遠實成だ。久遠劫の前に已に佛であるが、久遠劫の苦行難行を經て佛業を完成するのである。三千大千世界は、尺寸の地といへどもお釋迦様が、衆生のために身命を棄てたところでないところはない、かくしてお釋迦さまは始めて、佛世尊になられたのだ。誰も成佛はするのであるが、しかしそれは決して生やさしいことではない。血みどろの行、數限りのない捨身命の行によつてのみ成就されることである。

　しからばその行とは何か。菩薩行のことである。菩薩行とはなにか、己を捨てゝ衆生を助け救ふことである。所謂佛國土を淨め衆生を成就することだ。これは十年や二十年の仕事でもなく、一生や二生の仕事でもない。三界の衆生を救ひ終るまでの仕事である。久遠の事業だ。これこそ生もつものの唯一の目的であるといふのが法華の思想である。

太子はこれを御自分の思想にしたまうた。篤敬三寶とはこの意味である。この教を説かれたのが佛寶であり、この教が法寶であり、この教を弘める衆生が僧寶であるのである。

　さて、太子は、この法華の理想を實現する道は、　天皇に承順するにありと信ぜられたのである。卽ち國家を通してゞなくてはこの理想は實現出來ぬ。八紘爲字といふ　天皇の御理想が法華の理想であると見られたのである。故に承詔必謹である。

　太子は　天皇が衆生濟度の上御一人となられ、日本が佛法の源泉となり、佛國の起點となり、日本人がすべて大菩薩となることを念願としたまうたのである。太子に於ては、日本と佛法とは一にして二でなかつた。

　私は感じた、太子が法隆寺をされ、建造されたときの御心持を。この建物の一片の木、一掬の土にもこの雄大にして切實なる大念願を御籠め遊ばされたことを。かゝる大念願がこもつてゐてこそ、建築にしても繪畫にしても、彫塑にしても、生命ある眞の藝術となるのだ。木や土や金屬が已に物質でなくなる。そこには作者の血の温みや魂の光があつて、觀る者に迫るのだ。薄つぺらな職業的藝術家の作品が、唯技巧の塊であるのとは霄壤雲泥の差である。

　私は夢殿の階に立つて、今日の戰爭のことを思つた。アジア十億の民に皇道を光被せんための戰爭である。これは日本の菩薩行でなければならぬと。不惜身命の皇軍將兵は、法のための不惜身命であると。更に思つた。文筆に從事するものゝ業も當にこゝにあるべきであると。

　私は法隆寺を去るに忍びなかつた。せめて一週間でもいゝから、その鐘の音や夜の景や、朝夕の光を味はひたかつた。私は金堂の本尊様や、模寫中の壁畫や、太子の御像を念じつゝ合掌瞑目、南大門を出た。

　晝食後、鹿寄せに打興じ、一行は春日神社と東大寺まゐりをすることゝなつたが、河上氏は、私たち朝鮮からのものを誘うて、唐招提寺、薬師寺を見せて下さつた。私はその厚い友情に感謝する。

　河上氏は薬師寺の聖觀音像が特に好きだといはれたが、さういはれて見れば、河上氏の相貌が、その觀音さまに似たところがある。やつぱり因緣があるのだらう。この聖觀音さまは百濟人の作だといふことだ。

　　古寺の秋の夕日の薄明に

　　　聖觀音の御頬光れる

　首の取れた觀音さまの美しい立像を見た。首が折れても、慈悲の御姿はくづしたまはぬ。

　あれが法華寺、あれが西大寺と指しながら夕陽を浴びて宿に歸る。

　明くれば十二日の朝。昨日に劣らぬいゝ朝だ。

　私は暗い中にホテルを出て、春日神社へ向つた。十年前一度お參りしたことがあるが、記憶もおぼろである。

　まだ人出はなかつた。

　一の鳥居を入る。千何百といふ燈籠の中には、火の點つてゐるのもあつた。苔蒸す燈籠――それは、煩悩の象徴のやうに見える。煩悩あればこそ、神佛にまゐるのだ。小さい煩悩に堪へかねて、神佛に縋る衆生の姿は可愛いゝ。宗教も藝術も、要するに衆生の煩悩の泥に咲く蓮華だ。奈良の都で生まれた萬葉の歌も、結局は煩悩の歌である。私は、日本人は煩悩の多い民族だと思つた。床の間をしつらへ、掛物をかけ、花を活け、庭を造り、歌を作ることの好きな日本人は、煩悩の多い民族であり、また煩悩を愛する民族である。煩悩はつらいが、また美しいものである。

　暁の森は静寂そのものだ。薄靄が老木の息のやうに木の間を流れてゐる。風さへない。

　ばさばさ。鹿が落葉を鳴らして通つた。

　　ばさばさと落葉鳴らして牡鹿かな

　その音が尚幽寂を増すやうである。

　鹿の噴く清水に口と手を淨める。

　私は春日神社の南門前に立つた。腰の曲つた老人がお庭の掃除をしてゐる。箒の音がさつさつと鳴つた。

　參拜後私は飽かず社殿を眺めた。美しい。線も丹塗も環境と一つになつて美しい。私は獨り廊下を歩いて見た。あちらこちらうろうろして見た。物の一時間も私は自分を忘れて見惚れてゐた。若宮にも參拜し、神樂殿も觀た。奈良朝時代の貴人の邸宅の一棟ださうだ。日本婦人のおつくりは、春日神社の味を出さうとするやうに思はれた。何んと柔かい、優しい美しさだらう。

　春日神社の美は白木造の古式のものに、大陸文化を取容れた美であらう。しかも、その大陸文化なるものが、大陸的なぎざぎざさを全然淘汰されて、日本的になり終つたものであると思ふ。

　私は出發の時刻を控へてゐるので、後髪を引かれる思ひで春日神社を去つた。私は佛教的な枯淡から、美しさを求める、日本的な煩悩に染まつたやうに感じた。印度人はひたむきに、煩悩から離れよう離れようと藻掻いてゐる。難行苦行の姿だ。ところが日本人は、煩悩を愛し、煩悩に浸りながら、しかも煩悩を超越しようとしてゐる。現實を愛する。自然を愛し、異性を愛する。酒に醉つて歌ひ、且つ踊る。無常をさへ美と感じて、その中にものゝあはれを味ひつゝ解脱を求める。一見矛盾のやうであるが、反つて煩悩卽菩提に合致するのであらう。私は京都を觀て尚この感を深くした。

京都見學メモ

　京都はたつた一晩泊まつたきりである。もつとも昭和四五年頃京都を觀たことはある。あの時は主に寺を廻つた。そして谷村氏の好意で瓢亭の春雨の宵一タ飲ませて戴いた。

　京都へ着くと私たち一行は、御所を拜觀した。左近の櫻、右近の橘など説明を聽きながら、紫宸殿、清涼殿など拜觀した。明治大帝御卽位の御場所や、御愛賞の池塘も拜觀した。畏れ多いほど御質素な官居である。賢所の御前の畳一枚の御座所は誠に象徴的に拜された。陛下の御日常は道場の御生活のやうに拜されて勿體なき極みである。皇祖の御魂代たる神鏡と床を同じうせられて、ひたすら億兆の民草の淨まることを念じたまひ行じたまふやうに拜察される。大祓の儀や、明治大帝の御製を思ひ合はせまつつた。

　御所より退下、宿に歸つて晝食を取り、一行は思ひ思ひに半日を過すこととなつた。

私は嵐山組に加つた。久米、河上兩氏が案内役で、バイコフ氏一行も加はり、臺灣の代表たちも一緒であつた。

嵐山の紅葉はまだ早かつた。喬木の頂上にさつと一刷毛淡紅色を塗つたやうなところがあつて、その他は、今にも高麗鶯が鳴き出しさうな綠であつた。

渡月橋を渡つて嵐山の麓、大堰川の畔の小徑を上り、大悲閣の下の茶屋に休む。千鳥ケ淵など指さる。その昔大宮人等が舟遊びしたところださうだ。

二艘の小舟に一行分乗、保津下りの快味に浸る。花の山二丁上れば大悲閣には參詣出來なかつた。川に臨む旅館がある。是非、一度泊り度かつた。

大堰川寺も紅葉も見ざりけり

それでも好きな友と、好山水とが嬉しかつた。

歸りに嵯峨野の柿を買ふ。おいしかつた。

　 柿甘き嵯峨野の旅の夕日かな

　京都府知事の晩餐會。おいしい御馳走であつた。

　食後別室で、第一回大東亞文學者大會解散式があつた。久米氏、「戰時下の文學者大會も戰争である。文學者の大東亞のための働きはこれから始る。一路平安を乞ふ」と主人側として挨拶を述ぶれば、北京大學の錢稻孫氏、その眞摯朴訥な辨で、筆を揮つて、今大會の精神を普及し、以て大東亞戰に協力せんことを誓ひ、萬歳を唱和した。時は九時。

　淀野隆三氏の好意にて祇園の舞子の舞踊を見る。

「だらりのおびよ、ですよ」と久米氏が、舞子の髪形や衣裳など説明して下さつた。

「お信心は？」

「祇園さんどつせ」

　私は京言葉の美しさを味はつた。

　祇園さん、卽ち八坂神社の祭神は牛頭天王卽ち素盞嗚尊であらせられる。八坂神社の緣起によれば、斎明天皇の二年八月、一千三百年前、高麗（高勾麗）の調進副使伊利之使主が、大使達沙と共に八十一人の使節を具して來朝の際、新羅の牛頭山、卽ち曾戸茂梨に奉祀せられてあつた神靈を捧持して、始めて、愛宕郡八坂郷に齋き奉りしに創まる、とある。創立以來皇室の御崇敬極めて篤く、後三條天皇初め[て]祇園に行幸あらせられ　清和天皇祠官に勅して、六月七、十兩日に疫病祓の祭を挙行せしめたまふたのが、祇園祭の起りである、とある。

　祇園の例祭の六月十五日は、半島に於いては流頭目と當字してNyudと呼んでゐるが、牛頭の牛の支那音はuNyuであるから、これは流頭日ではなくて、牛頭日ではなかつたらうか。曾戸茂梨は、今日の朝鮮語でも、牛の頭といふ義である。

　私かこゝで云ひたいのは、「イザナギ」「イザナミ」「スサノオ」三神が古來朝鮮に於いて、信仰尊崇せられてゐたまうたことである。熊野神社の御神符には、今日では朝鮮諺文として知られてゐろ文字で、これを假名に書き直せば、

「イサナキノミコト

　イサナミノミコト

　スサノオノミコト」

　となるのである。

　李朝成宗以來、古信仰、古神祠打破で、今では、古いことは言語によつて尋ねる外に由もないが、今日でも、朝鮮の民間では「サナギ」さまが部落の鎭守として、春秋祭られてゐる。しかも、イサナキは、朝鮮語では最初の男性、イサナミは最初の女性又は母の義であり、スサノオは、男、又は猛者男性といふ義である。

　私は京都印象記で、これ以上多く語ることは出來ない。たゞ私が、歴史、民族、特に、言語により、日、鮮兩民族は血統に於いても信仰に於いても、同祖同であり、日本語も朝鮮語も、僅かの努力で、共通時代の語根に遡ることが出來るといふ事實を述べれば足りる。

　淀野氏は、河上氏や私のために、第三次の酒宴を張つて下さつた。何んと美しい友情であらう。子の刻まで飲み且つ語つた。淀野氏は、「君が京都に來るなら一月でも二月でも家で泊めてやらう」とまでいはれた。その御言葉に甘えて、まさか淀野氏に泊めて貰ふわけにも行くまいがせめて三月位は京都や奈良に住んで見たい。そして、美しい歴史と藝術と人情に浸つて見たい。

1. 『文學界』1943年1月号 [↑](#footnote-ref-1)
2. アラスカは有名な西洋レストランの名前。銀座の朝日新聞社ビルのなかにあった。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 秦秀雄（1932～？）骨董評論家。もと星岡茶寮の支配人だったが、このころ目黒で驪山荘という料亭（目黒茶寮とも呼ばれた）を経営していた。 [↑](#footnote-ref-3)